トルコの黒海地方あたりのいろいろな民族について、これまで民族舞踊の Teacher 等から聞いた話などをまとめました。自分の興味のあることを Gemini に確認し、深掘りし、その回答に更に質問を重ねる形で書いたものです。民族に関することは当事者を含めいろいろな立場の人が侃々諤々の主張が飛び交うところであり、本資料も記載内容の「正しさ」を保証するものではありませんし、偏った視点の認識に基づく記載もあると思います。ましてや現状の AI の持つ特性で間違った情報も含まれるかもしれません。私自身も理解の途中段階であり、この資料により何らかの政治的主張を行う意図はまったくありません。試行錯誤での記載ということをお含みいただき、あまりの強烈な突っ込みはどうかご遠慮ください。間違いがありましたらソフトにご指摘いただけたらありがたいです。

2026/09/30 Denć wt. Gemini

2026/10/01 update

黒海東部・コーカサス民族文化レポート

—— トルコ黒海東部地域界隈の民族事情（舞踊関連） ——

トルコの黒海東部沿岸（旧ポントス地方）からコーカサス山脈、そしてメソポタミア・中東の山岳地帯へと至るエリアは、世界の民族音楽やダンスの愛好家にとって「究極の宝庫」です。本レポートでは、ラズ人、ヘムシン人、アゼルバイジャン系住民、そしてポントス・ギリシャ人などの歴史的経緯、文化、言語、そして民族楽器やダンスの特色について網羅的にまとめています。

1. ラズ人とヘムシン人：黒海東部の二大先住コミュニティ

トルコの黒海東部沿岸（旧ポントス地方）は、北を黒海、南を急峻な山岳地帯に挟まれた孤立した地形が生み出した、強烈なアイデンティティを持つ少数民族のモザイク地帯です。その中核を成すのがラズ人とヘムシン人です。

■ ラズ人（Laz）～黒海の海と山を支配する熱き人々～

- **現状の分布状況：** 主にトルコ北東部のリゼ県東部（パザル、アルデシェン、フィンディクリなど）からアルトヴィン県沿岸部（アルハヴィ、ホパ）、そして国境を越えたジョージアのサカルトヴェロ（アジャリア自治共和国）にかけて分布しています。

- **歴史的経緯：** 言語学的にジョージア人（グルジア人）に近いコレーズ系の先住民族で、古代の「コルキス王国」の末裔とされています。中世まではキリスト教を信仰していましたが、15～16 世紀にオスマン帝国に組み込まれる中でイスラム教（スンニ派）に改宗しました。これにより、キリスト教のままだった本国のジョージア人とは異なる独自のアイデンティティ（トルコへの強い国家帰属意識と、ラズ人としての文化の維持）が形成されました。

・**言語の特色：** 南コーカサス語族（カルトヴェリ語族）に属するラズ語（Lazuri）を話します。ジョージア語の親戚ですが、何世紀もの分離により独自の進化を遂げており、トルコ語からの借用語も多く含みます。現在は文字化も試みられていますが、若者の日常会話での使用は減少しており、ユネスコの消滅危機言語に指定されています。

・**文化・音楽・踊りの特色：** 黒海地方の代名詞である超高速ダンス「ホロン（Horon）」のトップランナーです。ラズ人のホロンは、まるで黒海で獲れるカタクチイワシ（ハムシ）が網の中で跳ねるかのように、肩を激しく細かく揺らす動作（ティトレメ）が特徴です。伴奏には、小型の擦弦楽器ケメンチェ（Karadeniz Kemençesi）や、伝統的なバグパイプであるトゥルム（Tulum）が使われ、そのトランス状態のような爆音とスピード感は圧巻です。

■ ヘムシン人（Hemshin / Hemşinli）～山奥のバグパイプを愛する人々～

・**現状の分布状況：** ラズ人よりもさらに標高の高い山岳地帯（ヤイラと呼ばれる高山原野）に暮らす、神秘的なコミュニティです。大きく 3 つのグループに分かれています。

1. 西ヘムシン：リゼ県の山岳部（ヘムシン、チャムルヘムシンなど）。日常語はトルコ語のみ。
2. 東ヘムシン：アルトヴィン県の山岳部（ホパ、ボルチュカなど）。独自の言語を熱心に保持。
3. 北方ヘムシン：ロシアやアブハジアなどに暮らすキリスト教徒のグループ。

・**歴史的経緯と「宗教」による分断：** ルーツは古代～中世のアルメニア人です。8 世紀頃、アラブ人の圧政から逃れるためにアルメニア南部から黒海の峻険な山奥へと移住し、当時の指導者ハマムの名にちなんで「ハムシェン（ヘムシン）」と呼ばれるようになりました。

ラズ人同様、17～18 世紀にかけてオスマン帝国の下でイスラム教（スンニ派）に改宗しました。これが彼らの歴史の最大の転換点となります。1915 年の第一次世界大戦中、オスマン政府によるキリスト教徒のアルメニア人への大規模な強制移住・迫害（アルメニア人ジェノサイド）が起きた際、すでにムスリムであったトルコのヘムシン人は国家の同胞とみなされ、迫害の対象外となりました。そのため、先祖代々の土地に現在も住み続けられているのです。

・**言語の特色：** 東ヘムシン人が話すホムシェツィ（Homshetsi）は、アルメニア語のきわめて古い方言です。文字を持たない口承言語であり、山岳部という地理的隔離によって他のアルメニア人コミュニティから完全に分断されたため、中世のアルメニア語の響きをそのまま現代に残すタイムカプセルのような言語となっています。

・**文化・音楽・踊りの特色：** ラズ人がケメンチェを好むのに対し、ヘムシン人はバグパイプ「トゥルム」を熱狂的に愛します。彼らのホロン（ヘムシン・ホロン）は、ラズ人のものに比べるとテンポがややゆったり～中速であり、足を力強く踏み鳴らし、円陣全体で沈み込むような重厚でエレガントな上下動が特徴です。女性のヘッドスカーフ（プシ）に鮮やかな黄色や赤の縁飾りがあり、夏の高山放牧地（ヤイラ）で巨大な円（サークル）を作って踊る姿が印象的です。

2. アルメニアとヘムシンの「切ない片思い」、ラズとジョージアの「オープンな両想い」

同じ「イスラム教に改宗してトルコ側に残った少数民族」でありながら、それぞれのルーツにあたる周辺国との関係性は、驚くほど対照的です。

■ アルメニア ↔ ヘムシンの「文化的な片思い」

アルメニア国内や欧米のアルメニア人ディアスポラにとって、ヘムシン人は「歴史の傷跡で失われた、きわめて古風で純粋なアナトリア系アルメニア文化を奇跡的に保持している愛おしい同胞」です。アルメニアの伝統ダンス専門家(「Karin」などの著名グループ)は、ヘムシンの伝統踊り(Hamshen Kochariなど)を現地で採集し、「失われたルーツのダンス」として熱心にステージで踊り、継承しています。

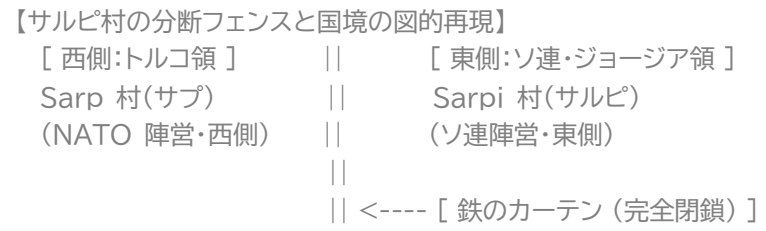
しかし、トルコ国内のヘムシン人の反応はきわめて困惑に満ち、時には明確に拒絶します。トルコ国内において「アルメニア」というレッテルを貼られることは、歴史的・政治的対立から社会的な孤立や「裏切り者」とされる深刻な政治的リスクを伴うためです。身の安全を守るため、彼らは「私たちはアルメニア人とは関係ない。黒海独自の民族(あるいは中央アジア由来のトルコ族)だ」と主張せざるを得ず、両者の間には切ないボタンの掛け違いが生じています。

■ ジョージア ↔ ラズの「オープンな兄弟関係」

対照的に、ラズ人とジョージアの関係ははるかにポジティブで開放的です。トルコとジョージアの間には深刻な歴史的対立がなく、トルコ国内でジョージア・コーカサス系ルーツを語ることに政治的リスクがないためです。ジョージア側はラズ人を「歴史の波でイスラム教徒となり国境の向こう側へ行ったが、元々は同じ血を引く誇り高き兄弟だ」と温かく捉え、国立民族舞踊団のレパートリーにもラズのホロンをベースにした「ラズリ(Lazuri)」を必ず組み込んでいます。トルコのラズも「自分たちはトルコの忠実な市民だが、ルーツはコーカサスだ」と堂々と公言し、冷戦崩壊後は国境(サルピ検問所)を越えて日常的に行き来し、音楽や踊りのフェスティバルで共にホロンを踊る熱い「両想い」の共生関係を築いています。

3. 鉄のカーテンに響いた暗号の歌:サルピ村の分断の悲劇

ラズ人の近伝統史において最も生々しく切ない悲劇の舞台となったのが、黒海沿岸にある「サルピ(Sarpi / Sarp)」というひとつのラズ人の村です。



1921 年、新しく誕生したトルコ共和国とソビエト連邦（ロシア）の間で国境線が画定された際、あろうことかこのサルピ村の真ん中に国境のフェンスが引かれてしまいました。村の西側はトルコ領（Sarp）、東側はソ連構成国のジョージア領（Sarpi）となり、昨日まで隣り合わせに暮らしていた親戚や、「夫がトルコ側、妻と子供がソ連側」といった家族が一瞬にして国家の壁によって引き裂かれました。

第二次世界大戦後、ソ連と西側陣営（トルコは NATO に加盟）の対立が激化すると、この国境は完全に閉鎖され、文字通りの「鉄のカーテン」となりました。フェンスに近づくことすら銃撃されるリスクがあり、手紙や電話も一切不可能な完全分断状態が何十年も続きました。

そこで人々が生み出したのが、「ラズ語の歌による暗号通信」でした。国境を警備するトルコ人兵士もロシア人・ジョージア人兵士も、山奥の少数民族の言葉である『ラズ語』を全く理解できませんでした。ラズの人々はこの盲点を突き、国境近くの畑で農作業をするフリをしながら、大声でラズ語の民謡を歌い合いました。彼らは伝統的なメロディはそのままに、歌詞の中に「誰々が病気になった」「誰々が亡くなった」「子供が生まれた」といった家族の安否やメッセージを即興で織り込んで対岸へ伝えたのです。兵士たちには単なるのどかな労働歌にしか聞こえなかったため、この命がけの通信は見逃されることとなりました。

ソ連側のサルピ村で葬儀がある日は、トルコ側の親族たちが国境近くの丘に集まり、フェンス越しに見える対岸の棺に向かって声を限りに哀悼の歌を歌って見送ったという記録もあります。1980 年代末のソ連崩壊とともに検問所が開放され、何十年ぶりかの劇的な再会を果たした家族たちの記憶は、現在のラズ人ポップスやロックの根底に流れる「遠い対岸への思慕」と深い哀愁（ホロロンと呼ばれる切ない旋律）の源流となっています。

【追加セクション】なぜ「ヘムシン」も「ラズ」として一括りにされ、混同されるのか？

YouTube の音楽動画や現地の観光プロモーションを見ていると、「ラズ（LAZ）」というタイトルの動画の中にヘムシンの音楽や踊りが混ざっていたり、両者が同じように扱われていたりすることが多々あります。この二つの民族が混同・一括りにされる背景には、主に 3 つの理由（地理・政治・マーケティング）があります。

①「黒海東部の人々」を指す，大雑把な総称としての「ラズ」

これはバルカン半島の移動牧畜民が誰彼構わず「ヴラフ」と呼ばれた状況と非常に近いです。トルコ国内（特にイスタンブールなどの大都市や西部の人々）において、「黒海東部の沿岸や山に住んでいて、独特の訛りがあり、ホロンを踊り、ケメンチェやトゥルムを鳴らす人々」は、民族的な厳密さを無視して全員大雑把に『ラズ（Laz）』と呼ばれてしまう傾向があります。現地の人々自身も、対外的に説明するのが煩雑な時や、地域の連帯感を示すために「俺たち黒海のラズだからさ！」と自称することがあります。

② 政治的・社会的なタブー（アルメニアという言葉の重み）

トルコ国内において「アルメニア（Ermeni）」という言葉は、歴史的・政治的にきわめてデリケートであり、時にネガティブな感情を呼び起こすタブーに近い言葉です。そのため、ヘムシンの人々自身も、周囲から「お前たちのルーツはアルメニア人だろう」と言われることを嫌い、「いや、私たちはアルメニア人とは何の関係もない。黒海独自の民族だ」と主張する傾向があります。その結果、政治的に安全で、ポジテ

ィブなイメージのある「ラズ」や「黒海人（Karadenizli）」という大きな傘の中に隠れる（同化する）方が都合が良いという社会的背景があります。

③ 音楽ビジネス・マーケティング上の戦略

YouTube 等で発信する場合、世界的に認知度が高く、検索されやすいワードは「ヘムシン（Hemşin）」よりも圧倒的に「ラズ（LAZ）」です。「LAZ MUSIC」「LAZ HORONU」とタイトルを打った方が再生数が伸びるため、動画制作者がヘムシンのトゥルム（バグパイプ）の踊りであっても「LAZ」とタグ付けしてしまう商業的な事情が混同を後押ししています。

★ ダンス愛好家必見：動画での実用的な見分け方

YouTube のタイトルに「LAZ」とあっても、文化的には「ヘムシンのホロン」であるケースは、以下の特徴で簡単に見分ける（聞き分ける）ことができます。*（編者注：この解説の信頼度不明）*

注目ポイント	本物のラズ（Laz）の踊り	ヘムシン（Hemşin）の踊り
主役となる楽器	ケメンチェ（擦弦楽器）が主流。	トゥルム（バグパイプ）が絶対的な主役。
踊りのテンポ	超高速。一瞬も止まらないスピード感。	ややゆったり～中速。重みがある。
身体の動き	肩を細かく激しく震わせる（カタクチイワシの動き）。	足を力強く踏み鳴らし、円陣全体で沈み込むような上下動。
衣装の色彩	黒を基調としたスタイリッシュなものが多い。	女性のヘッドスカーフ（プシ）に鮮やかな黄色や赤の縁飾りがある。

4. アゼルバイジャン系住民とトルコの関係：宿敵から「一つの民族、二つの国家」へ

現代のトルコとアゼルバイジャンは「一つの民族、二つの国家（Tek millet, iki devlet）」という強固な兄弟関係にありますが、歴史的には激しい戦争を経て現在の状況が形作られました。

・歴史的背景：かつての宿敵と運命の転換点

16～18 世紀にかけて、トルコの母体である「オスマン帝国（スンニ派）」と、アゼルバイジャンの歴史的ルーツである「サファヴィー朝（シーア派・支配層はアゼルバイジャン系トルコマン族）」は、アナトリア東部やコーカサスの覇権を巡り激しい戦争を繰り返す最大のライバルでした。その後、18～19 世紀のロシア帝国の南下（ロシア・ペルシャ戦争等）によりアゼルバイジャン人の土地はロシア領とペルシャ（イラン）北部に分断されます。

両者が「兄弟」へと大転換したのは 1918 年です。ロシア革命の混乱で独立を宣言した新生アゼルバイジャン共和国を救うため、オスマン帝国が「イスラムコーカサス軍」を派遣し、アルメニア・ロシア勢力から首都バクーを解放するために共に戦ったことから、同じトルコ系同胞としての強烈な連帯感が生まれました。

・移住の経緯と現在の分布：

トルコ国内のアゼルバイジャン系住民は、19 世紀のロシア征服期や第一次世界大戦期の衝突から逃れてきた避難民の波、1920 年代以降のソ連の共産主義迫害から逃れた政治亡命者、長年にわたるナゴルノ・カラバフ戦争の混乱から逃れてきた紛争・経済移住者によって構成されています。現在の主な居住地は、アゼルバイジャンの飛び地（ナヒチェヴァン自治区）とわずかに接するトルコ北東部のカルス（Kars）、ウードゥル（Iğdır）、アルダハン（Ardahan）などの国境地域、および近年の移住者が集まるイスタンブールやアンカラなどの大都市圏です。

・現在の生活とアイデンティティ：
彼らはトルコ社会に最も完璧に溶け込み、好意的に受け入れられている少数民族です。トルコ語とアゼルバイジャン語は同じ「オグズ・トルコ語派」に属し方言程度しか違わないため、言語の壁がほぼゼロです。社会的な差別を受けることはなくビジネスや学術界で広く活躍し、国会へ議員を輩出するほど政治的にも統合されています。宗派（シーア派主流）や独自の歴史記憶を大切にしつつも、文化的には完全にトルコ人と融和しています。

5. 周辺の他の少数民族と、海を渡ったポントス・ギリシャ人

■ チュヴェネブリ（Chveneburi / ラズ系ジョージア人）

19 世紀の露土戦争の際、ロシア領となった南コーカサスからオスマン帝国側（トルコ）へ逃れてきたイスラム教徒のジョージア人です。「チュヴェネブリ」とは彼らの言葉で「私たちのような者」を意味します。黒海東部の山岳部に入植し、ジョージア語の歌や、美しいコーカサス特有の多声（ポリフォニー）合唱の要素を今に伝えています。

■ ポントス・ルーマ（イスラム教徒ギリシャ人）

トラブゾン周辺 of 山岳部（チャイカラ地方など）には、現在もギリシャ語の非常に古い方言（ポントス・ギリシャ語 / ローマ語）を日常的に話す人々が暮らしています。彼らは宗教がイスラム教であったため、後述の住民交換の対象から外れ、現在もトルコ人としての自認を持ちながら、古代の言葉とケメンチェの文化を山奥で守り続けています。

■ ポントス・ギリシャ人の悲劇と遺産

かつて黒海沿岸（ポントス地方）で最大の勢力を誇ったのが、キリスト教徒の「ポントス・ギリシャ人」でした。古代ギリシャの植民都市に起源を持ち独自の鉱山・商業文化を築いていましたが、20 世紀初頭の希土戦争の混乱で迫害が激化。1923 年のローザンヌ条約に基づく「ギリシャとトルコの住民交換」により、約 30 万人以上が先祖代々の故郷を追われ、見知らぬ土地ギリシャへと強制移住させられました。
彼らはギリシャ北部（サロニカ＝テッサロニキ等）やアテネ周辺にコミュニティを築き、当初は差別されながらも強烈なポントス人プライドを保持しました。彼らが持ち込んだダンスは「ポントス・ダンス（Serra など）」と呼ばれ、ギリシャの他の踊りとは一線を画す、戦士の訓練のような凄みのある躍動感

と鋭い肩の震えを持ちます。伴奏楽器「ポントス・リラ（ケメンチェ）」の哀愁の旋律は、今なおギリシャ国内の若者たちを熱狂させています。

6.【早見表】民族楽器と伝統ダンスの多言語・多民族呼称

楽器・踊りの種類	トルコ語 / ラズ語 / ヘムシン語	ジョージア語（グルジア）	アルメニア語 / ギリシャ語 / その他
① バグパイプ	Tulum（トゥルム）	Guda / Gudastviri	Parkapzuk（アルメニア）
② リラ（擦弦楽器）	Karadeniz Kemençesi	Chuniri（チュニリ）	Pontiaki Lyra（ギリシャ）
③ アコーディオン	Kars Garmonu（カルス）	Garmoni / Tushuri	Qarmon（アゼルバイジャン）
④ 打楽器（太鼓）	Davul（ダヴル）	Doli（ドリ）	Dhol（アルメニア）/ Nağara
⑤ 黒海高速ダンス	Horon（ホロン）	Khorumi（ホールミ）	Choros（ポントス・ギリシャ）
⑥ 雄大な円舞	Halay（ハライ）/ Govend	—	Kochari（アルメニア）/ Köçəri

おまけ：ポントス、ポンドス？

「ポントス」と表記するのが本来の古典的な呼び方に近く、歴史的・学術的にもより正確だからです。「ポントス」と「ポンドス」で濁るか濁らないかには、以下のような理由があります。

1. 本来のギリシャ語の綴りと発音

この地域の名前は、古代ギリシャ語の**「Πόντος（Pontos：ポントス）」**に由来しています。古代ギリシャ語では「ト（t）」にあたる音に濁りがないため、そのまま日本語に直すと**「ポントス」**になります。「ポントス王国」や、新約聖書などの歴史的・学術的な文脈では、この本来の形に基づき「ポントス」と書くのが標準的です。

2. なぜ「ポンドス」と書かれることがあるのか？

一方で「ポンドス」という表記を見かけるのには、主に 2 つの理由があります。

①現代ギリシャ語の発音の変化：

現代のギリシャ語では、**「ν（n）」の音の後に「τ（t）」の音が続くと、音が濁って「nd（ド）」に近い発音に**

変化するという言語的なルール（鼻音化）があります。そのため、現代のギリシャ人が発音すると「ポンドス」のように聞こえるため、現代の現地発音をそのままカタカナに直した結果「ポンドス」という表記が生まれました。

②英語（Pontus）の読みのイメージ：
英語では「Pontus」と綴りますが、英語の音の響きにつられて、なんとなく「ポンドス」と濁って書いてしまう日本語のケースも少なからず存在します。

今回のレポートや学術的な歴史背景を説明する上では、本来のルーツである古代の呼び名に基づき**「ポントス」**に統一して記載しています。

一方で、もし現代ギリシャの民族音楽（ポントス・ギリシャ人のリラ音楽など）の現代の CD やフェスティバルを探す場合、現地のリアルな発音を意識して「ポンドス音楽」とあえて現代風に濁って紹介されているケースもあります。

追加補足― アルメニア人とヘムシン人の歴史的関係と宗教的変遷 ―

本稿は、トルコ黒海沿岸地域における民族歴史調査の追加補足として、かつて同地域を含むアナトリア東部に広く居住していた「アルメニア人」と、現在も黒海東部沿岸の山岳地帯に暮らす「ヘムシン人（Hemshin/Hamshen）」の歴史的関係、および宗教的・文化的な境界線による相互の距離感についてまとめたものである。

1. ヘムシン人の起源とアルメニア人との共通のルーツ

歴史的および言語学的な研究において、ヘムシン人は「アルメニア人の一派（民族言語学的グループ）」であるというのが定説となっている。彼らのルーツは、8 世紀末（789 年頃）にアラブ軍の支配と迫害を逃れるため、アルメニアの貴族アマトゥニ家のハムザ・マミコニアン（またはハマム皇太子）に率いられて黒海東部沿岸（現在のリゼ県山岳地帯など）へ移住した数万人のキリスト教徒アルメニア人に遡る。彼らは移住先に「ハムザシェン（現在のヘムシン）」という街を築き、長らく独自のキリスト教（アルメニア使徒教会）文化を維持していた。

2. オスマン帝国期における「宗教の分岐」と距離の発生

かつて同一の信仰を持っていた両者の関係に決定的な亀裂を生んだのは、オスマン帝国による統治の進展と、それに伴う「イスラム教への改宗」である。17 世紀から 18 世紀にかけて、黒海沿岸地域のヘムシン人は過酷な税制（ジズヤなど）の回避や社会的保護を得るため、集団でキリスト教からイスラム教（スンニ派）へと改宗した。

この改宗により、オスマン帝国の「ミッレト制度（宗教コミュニティごとの統治）」において、両者は完全に分離された社会階級に属することとなった。

項目	一般のアルメニア人	ヘムシン人（トルコ国内に残留した側）

主たる宗教	キリスト教（アルメニア使徒教会）	イスラム教（スンニ派）
主要言語	アルメニア語	トルコ語、またはヘムシン方言（アルメニア語の古語が変形したもの）
帝国での扱い	非ムスリム（ジミ）として独自の教会自治	ムスリム（支配層の宗教グループ）として同化

3. 近現代における相互の心理的・空間的距離

宗教が異なることで、両者の間には明確な「距離」が生じることとなった。

【心理的な心理的・アイデンティティの隔たり】
一般のキリスト教徒アルメニア人から見れば、イスラム教に改宗したヘムシン人は「同胞を捨てて支配者に同化した存在」と映ることがあった。一方、ヘムシン人側も、オスマン帝国末期の政治的緊張や 1915 年のアルメニア人虐殺（ジェノサイド）の嵐の中で、自らが「アルメニア人」と見なされることを避けるため、意図的にアルメニア的ルーツから距離を置き、「私たちは独自のムスリム集団（あるいはトルコ人）である」というアイデンティティを形成・強化していった。

【文化的な痕跡】
ただし、完全に断絶していたわけではない。ヘムシン人の間では、現在でもアルメニア使徒教会の祝祭に由来する「ヴァルダヴァル（Vardavar）」という水掛け祭りの習慣や、アルメニア語起源の地名・語彙が形を変えて残っており、文化的な底流における繋がりは証明されている。

【結論】
結論として、彼らは共通の祖先を持つものの、オスマン帝国期における「宗教の分岐」によって社会制度的にも居住空間的にも分離され、近代以降のデリケートな政治社会情勢も相まって、互いに明確な心理的・社会的距離を置きながら共存（あるいは分断）してきた歴史的経緯がある。

※本資料は学術的・文化的な歴史調査の補足として AI によって生成されたものであり、特定の政治的見解を支持するものではありません。